

下田歌子展

下田先生の御命日（十月八日）に因み、今回は和歌短冊及び欧米教育視察（明治二十六年九月～二十八年八月）前後の資料を中心として展示したい。
下田先生は、明治二十六年、明治天皇の第六・七皇女常宮・周宮内親王（後の竹田宮・北白川宮）のご教育掛の内命をうけ、先進的な欧米諸国に、女子教育の状況視察の留学を行ない。社会における女性の認識を新たにし、女子教育の必要性を痛感するのである。
帰国後、両内親王の教育掛を拜命するとともに、女子教育への本格的な取り組みを開始する。欧米の事情については、「泰西婦女風俗」（大日本女学会 明治三十二年刊）などの著作もある。

1 和歌短冊

(1) 幼青年期

- 一 野鷹狩 なに鳥かかなしき声の聞ゆなり 鷹かるひとや野辺を行らん
（せき子 十才 文久三年）（八〇三）
- 二 野遊 おもふとち日かけ長閑けき春野の すみれつはなに遊び暮さむ
（せき子 十一才 元治元年）（八一二）
- 三 水遠立秋 夏の日になかれ尽して河なみ 十一才 あきをしれとかすみ渡るらん
（せき子 十二才 慶応元年）（八一四）
- 四 よろこひを取やもちひのかしきより はかりしられぬ四方の民の戸

(2) 壮老年期

（明治七、八年頃 宮中奉仕時代）（一七一）

- 一 敷島のやまところのはしらとも なりてたなむそのひめ松
（教え子らに与えた歌）（七九九）
- 二 松間紅葉 松はやしゆき尽せりと思ひしは 来つるなりけり
（七九七）
- 三 寄井述懐 塵ひちのかゝらはかゝれ山のゐの
そこのこゝるのにこりやはする
（九八七）
- 四 杖となる野辺のこま川に引かれつゝ おい木も千世の春や重ねむ
（七十七才 昭和五年）（九九一）

書簡 下田歌子より加賀美繁子宛（三三九七）

一通 付別紙和歌封筒共 明治二十六年八月十四日付

洋行期間延期聴許通達書（九五）

宮内大臣土方久光より下田歌子宛 明治二十八年一月四日付 付洋行費下賜

通達書二通 当初、留学期間一年の予定を、さらに一年延長し、許可された旨の宮内省よ

りの通達書。

英仏伊澳白瑞米女子教育の大要（九六～九九）
下田歌子自筆草稿「明治二十九年」華族女学校用箋 四冊
「女子教育と社会との関係」、「泰西婦女風俗」の骨子となる草稿。総論では、「女子教育と教育・中等教育・上流女子教育、巡廻中の所感などが記載されている。」

フェロンの女子教育論（翻訳）（一二〇）
 下田歌子訳自筆草稿「明治二十九年」華族女学校用箋ほか一二二）
 フェロンは「(François de Salignac de La Mothe Fenelon 一六五一・八
 の重要性を唱え、特に女子教育に關心を持ち、良妻賢母主義の實際的教育を
 主張した。」（岩波西洋人名辞典）とある。

以上、「下田歌子関係資料」の中から展示した。付記した番号は、資料番号
 である。